

シンポジウム

象徴天皇制／君主制とジェンダー

井野瀬久美恵（甲南大学）

「共感する女性君主——ヴィクトリア女王が開いた可能性」

中澤達哉（早稲田大学）

「世襲原理と選挙原理の王位継承——マリア＝テレジア、表象、ジェンダー」

原 武史（放送大学）

「二人の皇后——貞明皇后と皇后美智子」

コメンテーター 長 志珠絵（神戸大学）／加藤千香子（横浜国立大学）

司会 吉野瑞恵（駿河台大学）／平井和子（一橋大学）

### 【趣旨】

2019年現在の日本では、天皇の退位・即位にともなう奉祝ブームが起こり、新天皇への「親しみ」が8割を超えるという世論調査結果も発表されている。この状況は、天皇と「国民」との一体化の形という点で、戦後の象徴天皇制の完成形とも見られよう。天皇制や君主制については、これまで民主主義や個人の自由・平等とのかかわりから絶えず議論がなされてきたが、現在では象徴天皇と戦後民主主義とを結びつけて評価する論者も少なくない。かつて天皇や天皇制システムについて強い批判的姿勢を打ち出していたフェミニズムやジェンダー研究者の間からも、正面からの批判はほとんど見られないようにみえる。だが、天皇のもとでつくり出される一体感や同調がはらむ包摂と排除の論理やジェンダー構造の固定化や差別といった問題は、そこに依然として存在する。

本シンポジウムで意図するのは、「国民」の一体感や同調を生み出す装置としての象徴天皇制を念頭におきながら、君主制／天皇制という問題に対して、ジェンダーとグローバルな比較史的視点から切り込むことである。この場合の一体感が醸成される「国民」は所与のものではありえず、包摂の範囲が変容することは言うまでもない。

「象徴天皇」という用語は、日本では通説的には新憲法体制下の天皇として認識されているが、「象徴」を天皇と国民の一体化を示す概念ととらえるならば、戦後のみならず戦前の天皇も、「君民一体」観に支えられていたという点で象徴機能を保持していたといえる。ヨーロッパにおいては、18～19世紀に戦争や革命を経る中で、フランス革命に代表されるように君主制廃止の動きが進んだ。だがその一方で、君主制を維持する国においては、神聖で絶対的な権威をもつ君主から「国民」の同意調達を存続の要件とする君主制への変容が生じ、そこで君主の「象徴」機能が強化されることとなったといえる。

ここで着目するのは、このように君主制／天皇制が、「国民」の同意調達、「国民」との一体性の構築によって延命を図ろうとする際に、ジェンダーが大きく作用したことについてである。「国民」の同意調達にあたっては、権力に体现される男性性のみならず、慈愛に体现される女性性は不可欠とならざるをえない。実際にそれほどのように発揮され、歴史過程にどのような影響をもたらすことになったのか。本シンポジウムでは、この問題を、近世～近代のヨーロッパおよび近現代の日本で登場した女性君主／皇后に焦点をあてて、具体的に明らかにしていくこととなる。

報告者は、以下のとおりである。まず、近世～近代ヨーロッパの君主制の変容過程とジェンダーについての報告は、イギリス史の井野瀬久美恵氏と中東欧史の中澤達哉氏の二人が行う。井野瀬氏

は、19世紀英国における「国民」と「帝国」の再編について、女性君主・ヴィクトリアのジェンダーに注目して論じ、中澤氏は、世襲原理とは異なる中東欧の選挙原理による王位継承のなかで登場した女性君主・マリア=テレジアのジェンダー表象に焦点をあてて論じる。また、日本政治思想史の原武史氏は、女性天皇を認めない近現代日本で、皇后という存在が「国民」に対してどのように影響力をふるうことになったのか、貞明皇后と美智子皇后という戦前・戦後の二人の皇后を取り上げて論じる。

ジェンダーという視点が、君主制や天皇制を歴史的にとらえる上でいかに重要であるか、そしてそれによってどのような歴史の側面が新たに切りひらかれるのか、このシンポジウムを通じて提示することができればと考えている。

#### 【報告者】

井野瀬久美恵（甲南大学） イギリス近代史：大英帝国と女性君主

「表象の女性君主——ヴィクトリア女王を中心に」『岩波講座 天皇と王権を考える7 ジェンダーと差別』（岩波書店 2002）、『興亡の世界史 16 大英帝国という経験』（講談社 2007、講談社学術文庫 2017）

中澤達哉（早稲田大学） 中東欧近世近代史：国民国家形成と王権

『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——「歴史なき民」の近代国民法人説』（刀水書房 2009）、  
「ヨーロッパの選挙王政と世襲王政——天皇譲位に寄せて」歴史学研究会編『天皇はいかに受け継がれたか——天皇の身体と皇位継承』（續文堂書店 2019）、  
「二重制の帝国から『二重制の共和国』と『王冠を戴く共和国』へ」池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』（山川出版社 2014）

原 武史（放送大学） 日本政治思想史：天皇制、女帝・皇后論

『皇后考』（講談社学術文庫 2017）、『〈女帝〉の日本史』（NHK 出版 2017）、『平成の終焉——退位と天皇・皇后』（岩波新書 2019）、『天皇は宗教とどう向き合ってきたか』（潮新書 2019）

#### 【コメンテーター】

長 志珠絵（神戸大学） 日本近現代史

『占領期・占領空間と戦争の記憶』（有志舎 2013）、  
「天皇〈家族〉の表象と新聞付録」桂島宣弘他編『「日本型社会」論の射程——「帝国化」する世界の中で』（文理閣 2005）

加藤千香子（横浜国立大学） 日本近現代史

『近代日本の国民統合とジェンダー』（日本経済評論社 2014）